

序 文

熊本大学は、昭和60年、当時の県知事から校地移転の検討の申し出を受け、学内の議論を経て、最終的には平成5年に現地での再開発を決定した。再開発が進行し始めた年に学内のほぼ全地区にわたって埋蔵文化財が存在することが明らかになり、平成6年度から埋蔵文化財調査委員会・調査室を設置し、再開発に先立つ埋蔵文化財の調査を継続してきた。本年はその10周年を迎える。

この間、現在に至るまで180件にわたる埋蔵文化財の発掘調査・立会調査が実施されてきた。ここで明らかになったことは、本学校地が各地域の埋蔵文化財包蔵地の中でも重要な文化財的価値のある地点に相当すること、そしてそこから得られた情報が地域の文化財の研究・保護において、きわめて有意義な提言ができるほどのものであるということである。とくに、黒髪町遺跡群の所在する黒髪北・南地区、本庄遺跡の立地する本荘地区は縄文時代から古代にかけての遺構・遺物群が充実したものであることを物語っている。

今回、埋蔵文化財調査室創設初期の2年間の調査成果に関する正式報告書をここに上梓することができた。本書には、黒髪町遺跡群、本庄遺跡をはじめとする8箇所の発掘調査成果が収録されている。この中でも黒髪北地区で実施された福利施設建設に伴う調査（9704調査地点）は、「馬」銘をはじめとするヘラ書き土器や土馬の遺物に象徴されるように、古代延喜式にみる「蚕養駅」の存在を窺わせるなど、きわめて重要な成果であった。また、南地区で実施された9412調査地点からは「國」銘の土製印が出土し、この地が官衙周辺地域であったことを裏付ける結果となった。

これら調査の一つをとってみても、大学校地に包蔵される文化財の資料的価値は図りしれない。調査委員会および調査室創立10周年を迎え、本学の文化財に対する取組みは益々重要性を帯びてきており、その責任の重さを感じる。これまで本学の埋蔵文化財調査にかかわり、御尽力およびご協力いただいた熊本県文化課および熊本市文化課をはじめ各位に厚く御礼を申しあげるとともに、今後の調査の円滑かつ充実した進行にさらなるご協力をお願いするものである。

平成15年3月15日

熊本大学埋蔵文化財調査委員会

委員長 北野 隆